

パーベル・ビダル教授との懇談会—キューバ資本論学習事情—

去る23日(木)、東京の新宿で、ハバナ大学経済学部教授・キューバ経済研究所研究員のパーベル・ビダル(35歳)さんを囲んで懇談しました。この3月、東京資本論学習会の皆さんと一緒にキューバでキューバ経済研究所と「マルクス主義の古典と、日本、キューバ、東アジア及びラテンアメリカ」というタイトルで合同シンポジウムを行い、その際、パーベルさんの紹介で、時代物の国営工場見学を行い*、また彼からも現在のキューバの財政・金融問題についてのレクチャーを聞いた間柄です。久しぶりの懇談に、宮川彰首都大学教授(資本論研究家)を始め、仲間とともに、いろいろなテーマで会話が弾みました。

* 『しんぶん赤旗』2011年4月6日菅原特派員記事「キューバの挑戦」参照。



←合同シンポジウム

私とは、数年前からのお付き合いですが、パーベルさんは、キューバ中央銀行に7年間勤務した後、キューバ経済研究所の研究員となり、キューバ研究者の間でこれまで十分に議論されてこなかった財政・金融問題について、斬

新な角度から鋭い分析と現状批判を行っており、内外で大きな注目を呼んでいる若手の研究者です。

懇談において、パーベルさんには、キューバの大学における資本論の授業、マルクス経済学の授業の現状を次のように話していただきました。

「ハバナ大学の経済学部では、政治経済学(マルクス経済学)、マクロ経済学(近代経済学)、企業経営の3部門に研究が分けられ、学生の関心は、それぞれ3分の1程度ずつです。マルクス経済学は、すべての学部の必修科目となっています。マルクス経済学の授業では、最初の6カ月間で資本論第一巻(『資本論』(新日本出版社新書版)では①-④)を学習し、後の6カ月で第二・三巻(『資本論』(新日本出版社版)では⑤-⑬)を学習します*。セミナーやシンポを行うと、『資本論』第一巻(マルクス執筆)と第二・三巻(エンゲルス編集)との矛盾が問題にされます。『資本論』の本は、資材不足から、学習用に学生には履修期間貸与されますが、履修が終われば返却しなければなりません」。

*中国との資本論研究交流を行っている宮川先生から、すかさず、中国も同じ状況ですとのコメントがありました。

筆者は、『資本論』のスペイン語版は、メキシコとキューバで出版されたものを持っています。キューバ版は、1980年に出版されたもので、これは、1962年に最初にキューバで出版されたものの再版です。このキューバ版は、1946年以降最も普及したスペイン語版を

元にして出版されています。キューバ版は、メキシコの経済文化協会から出版されたベンセスラオ・ロセスの翻訳ですが、翻訳に少なからずの問題があるといわれています。さらに1975年、メキシコでは、シグロ・ベインティウノ社からより信頼できる翻訳といわれるペドロ・スカロンによる翻訳が出版されています。

ちなみに、『資本論』が最初にドイツ語からスペイン語に翻訳されたのは1898年で、第一巻がフアン・フストの翻訳でマドリードで出版されました。三巻全部が翻訳・出版（マヌエル・ペドロソ訳）されたのは1931年、スペインのアギレール社からです。その後、1935年ベンセスラオ・ロセスの翻訳がマドリードで出版され、版を重ね、1946年からもっとも読まれたスペイン語版『資本論』となります。

現在、キューバでは、『資本論』は、古本市場では、時折見かけますが、三巻で50－60CUC(賃金の2か月分程度)ですから、キューバ人で買う人はまずいません。また、マルクス主義教程のような教本も、かつては、ブラス・ロカ『キューバ社会主義の基礎』（1961年、10万部普及）、イバン・オレイニク『社会主義政治経済学教程』3巻（1977年）が市販され、容易に入手できましたが、経済事情から、その後この種の教本は出版されておらず、学生用に大学の教科書として出版されているものがある程度です。

研究資料不足は、マルクス主義文献だけでなく、近代経済学、企業経営間の文献も同様です。これらの文献は、ほとんどキューバでは出版されておらず、かといって高い外国の書籍を買うことは、研究所でも予算の限界がありますし、個人のレベルでは望むべきものでもないことが実情です。

資本論学習会の人びとと（中央、青色のシャツがパーベルさん）→



「『資本論』は、経済が危機的になると読む人が増えますが、キューバでも関心は再び高まってきています」とパーベルさんは述べます。あるアメリカのキューバ研究者が、最近のキューバ人研究者の論文の中にほとんどマルクス・エンゲルス・レーニンの言及がないと批判する論文を書いています。それらの批判対象論文は、ほとんど現状分析であり、筋違いの批判となっていました。それにしても、筆者には、キューバ人研究者の論文や著作に、あまりにもマルクス主義の古典への言及や引用がないのが気になるところです。

パーベルさんは、現在ベトナムの改革「ドイモイ」に大きな関心をもって、研究しているといっています。「キューバは、現在、社会主義への過渡期社会なので、経済の運営には市場

が欠かせませんが、社会主義をめざすためには、現在のいろいろな困難を是正する必要があります。これまで、世界には社会主義社会はまだ存在しませんでした。最近アルフレド・ゲバラ(キューバの指導的映画人、チェ・ゲバラと無関係)が、われわれキューバ人は社会主義を理解していなかったと述べましたが、まったく正鵠を射ています。中国、ベトナムの改革の経験は、プラスの面、マイナスの面を含めて参考になります。しかし、それらをキューバにコピーすることではありません。社会主義社会は、現在のキューバに欠けているもっと豊かな内容を持った社会であるはずだと、研究の抱負を、静かな口調ながら、熱っぽく話しました。

パーベルという名前は、スペイン語にはもともとないものですから、一度、彼に、それは小説『鋼鉄はいかにして鍛えられたか』(新日本文庫、岩波文庫)の主人公、パーベル・コルチャーギンから取った名前かと聞いたことがあります。答えはその通りで、父親のホセ・ラモン・ビダル(通称チェイト)が、このソ連のオストロフスキーの革命青春小説を読んで感動し、主人公のような革命的な人間であってほしいと命名したのです。この小説は、ロシア革命のさなかに活動する青年の不屈の勇敢さと意志、祖国愛はどのようにして鍛えられたかを描いた名作といわれています。中国でも、キューバでも多くの革命青年が心を震わせて読んだ本です。父親のホセ・ビダルさんは、1980年代キューバ青年共産主義同盟(キューバ共産党の青年組織)の機関紙『フベントゥ・レベルデ』の編集長を務め、現在でもハバナ大学の講師をしている知識人です。フベントゥ・レベルデ紙は、時折、キューバ社会の矛盾を率直に指摘する記事を掲載するリベラルな新聞(週刊)ですが、パーベルさんは、「父もラディカルであったが、私は、一層ラディカルになった」と笑います。私が、彼を時々、コルチャーギンと読んでいたゆえんです。

そう、その小説のこの有名な部分、パーベルが墓場で人生を自省し語る部分を、チェイトさんも感動したのでしょう。

「人間にあってもっとも貴重なもの——それは生命である。それは人間に一度だけあたえられる。あてもなくすぎた年月だったと胸をいためることのないように、いやしい、そしてくだらない過去だったという恥に身をやくことのないように、この生命を生きぬかなければならない。死にのぞんで、全生涯が、そしてすべての力が世界でもっとも美しいこと——すなわち人類の解放のためのたたかいにささげられたと言いうるよう生きなければならない」(岩波文庫)。

(2011年6月25日) 新藤通弘